

第十三条

一 阿弥陀様の本願、不思議の力に寄りかかって、悪を恐れぬことは、また「本願ばかり」といって、往生が叶わぬ、とする説。これは本願を疑っており、善悪の宿業しゆくごうを心得ていません。良い心が起こるのも宿善がうながすゆえ、悪事がもよおされ為されるのも悪業あくごうのはからいゆえなのです。

故親鸞聖人は、

「兎うさぎや羊ひつじの毛先けしんについた塵ちりのような罪も、宿業しゆくごうによらないものはありません」と、おっしゃいました。

またある時聖人が、

「本願の働きに甘えてつけあがること。
前世ぜんせいにつくった善悪の業。」

「唯ゆい円えん房ぼうは、私のいうことを信じますか」

と、おっしゃったので、

「信じております」

と、お答えしたところ、

「それでは、私のいうことに違たがうことはあるまいな」

と、念をおされました。慎んでうけたまわりますと、

「それでは人を千人殺してほしい。しかればおまえの往生は決定けつじょうしましょう」と、おっしゃったのです。

「仰せではございますが、わたくしの器量では千人はおろか、ひとりの人も殺せようとはとても思えません」

「ならばなぜ、親鸞のいうことに違わない、といったのですか」

「これでわかるはずです。

なにこともわが心のままになるのであれば、往生のために千人殺せ、といわれればためらわずに殺せましょう。しかし、たったひとりでも、殺す業縁ごうえんがなければ殺すこと

∞ 行為の間接の条件。業が縁となって働くこと。

はできません。

自らの良心に従って殺さないのではなく、また、殺すまい、と思っても百人、千人の人をも殺してしまうものなのです」

と、おっしゃられたのは、私たちが自らの良心を良いと思い、悪心を悪いと思って、本願の不思議によつて救われることを弁えていないからなのです。

昔、間違つた考えに取りつかれた人がいました。悪事を犯した人を救うのが本願であるからと、わざわざ好んで悪事をこしらえ、往生の業ごうとすべきである、と説いたのです。

このため様々な悪事が行われるようになり、伝え聞いた聖人が手紙で、「薬があるからといって、好んで毒を飲んでほなりません」

と申し送られたのも、その邪説を取り除こうとされてのことで、必ずしも悪が往生を妨げるといふことではありませんでした。

戒律を守ることによつてのみ、本願を信じるというのであれば、私たちはどうして生死を離れることなどできましようか。このようなあさましい身であっても、本願を信じてこそ、それをほこり甘えることができますのです。

だからといって、身に備わっていない悪業を、よもやつくることなどできましようか。

「海や川に網を仕掛け、釣りをして渡世する者や、野山に猪を狩り、鳥を獲って命をつなぐ人々。また商人や田畑を作つて世を過ぐす人も、ただ同じことなのです。しかるべき因縁に導かれたなら、人間はどのようなこともやつてのけるもの」と、聖人はおっしゃいました。

しかし近頃、念仏者のふりをして、
「念仏は善人だけのもの」

と、いつてみたり、道場に貼り紙をして、
「これこれの行いをした者、道場に入るべからず」
などという者がいます。これらは、ひとえに立派な仏弟子との外面をつくろい、心の内には嘘・偽りをもつ者でしようか。

本願ばかりで犯した罪も、宿業にうながされてなしたもの。されば善事も悪事も、行為の報いにうち任せ、本願に頼んでこそ、他力信仰なのです。『唯信抄』にも、
「阿弥陀様にどれほどの力があると知って、罪深い身ゆえ救われ難いと思ふのか」と、ありましよう。本願にほこる心のあるにつけ、他力を頼む信心も定まるものです。

およそ悪業煩惱あくごうぼんのうを断ちた尽くした後に、本願を信じるといふのなら、本願に甘える思いもないはず。煩惱がなくなればすなわち仏となつて、弥陀みだの誓願せいがんも必要ないものとなつてしまいます。

「本願ほんがんぼこり」を戒める人々も、煩惱ぼんごうや不浄ふじょうにまみれているはず。その身もまた、本願ほんがんぼこりなのではないでしょうか。どのような悪を「本願ほんがんぼこり」と呼び、どのような悪を「本願ほんがんぼこり」でないとするつもりなのですか。

これは、かえつて未熟な考えではありませんか。